

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点 地域や関係諸機関との積極的な連携・協力が行われている実践事例

1. 基本情報

都道府県名及び市町村名

徳島県阿南市

学校名

阿南市立福井中学校

学校のURL

<http://www.infoeddy.ne.jp/~bamboo21/>

2. 学校紹介

学級数

【通常の学級】全学年各 1 学級 【特別支援学級】 2 学級 【合計】 5 学級

児童生徒数

【全生徒数】 58 人（平成 23 年 12 月 1 日現在）
（内訳： 1 年生 12 人、2 年生 29 人、3 年生 17 人）

学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

人権尊重と共生の社会をめざし、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな生徒を育てる。

【人権教育に関する目標】

（基本目標）「ふるさとを愛し郷土を担う人材の育成」

（重点目標）「ふるさとの文化や自然に学ぶ体験学習」

「ふるさと再発見事業」「地域との交流事業」

人権教育にかかる取組の全体概要

【家庭・地域・関係機関及び校種間の連携について】

『ふるさとを愛し郷土を担う人材の育成をめざして』

28 年間の継続した人権劇の取組

福井町ふるさと人権フェスティバル

教育集会所フィールドワーク及び講話

小中の教職員研修として、毎年、校区内にある教育集会所フィールドワークを実施し、同和問題解決への歴史や取組等を学んでいる。

「ふるさと再発見小中合同オリエンテーリング」

小中学生が合同で縦割り班を作り、校区内を探索し、地域の人々とふれあいながら、住み慣れた町の歴史や文化、自然を再発見する学習として実施している。

若竹ふれあい子ども会

学校・家庭・地域が連携して、人権を尊重する子どもを育てるため、地域の教

育力を活用し、人権を大切に作る心や態度を育て、基本的な生活習慣の向上を図ることを目的とした子ども会活動を行っている。

小中連携キャリア教育の取組（校区の事業所への訪問）

福井中学校区ブロック人権教育研究会の実施（保・小・中の連携）

福井識字学級との交流

小学校への出前授業（国際理解教育、特別支援教育）

3. 特色ある実践事例の内容

地域の先人の熱い思いを受け継ぎながら、「人権尊重のまちづくり」をめざして地域と学校が連携した取組

（取組のねらい、目的）

「人権劇」や「人権フェスティバル」を通して、よりよい仲間づくりを進め、さらには地域ぐるみの人間関係づくりや人権を尊重するまちづくりへと発展することをねらいとしている。

また、学校・家庭・地域の三者がともに連携しながらつくりあげる「人権フェスティバル」は、学校における人権の取組を地域に広めることと、地域の教育力を生かした活動を取り入れながら子どもたちを育てていくことをねらいとしている。

（人権劇の取組について）

28年前に上演した人権劇第1作は、『春寒（はるがん）』というタイトルであった。「人権侵害に気づかず見過ごしていないか。部落差別はどうにもならないこととあきらめていないか」ということを人権劇を通じて訴えた。わずか6名から始まった人権劇が、今では福井中学校の誇りとなっている。



題材については、地域の人権課題や学校の教育課題を取り上げるようにしており、人権劇が始まった当時の熱い思いは、今なおしっかりと先輩から後輩へと受け継がれている。今年の人権劇「あ・い・う・え・お」は、識字問題をテーマにしたもので、28作目を数えることとなり、10月23日に開催された「福井町ふるさと人権フェスティバル」では、2年生全員による人権劇を披露した。時間の調整が難しく短期間の練習となった。しかし、人権劇に関わるスタッフ全員が心を一つにして取り組むことができ、達成感や成就



感を味わうことができた。

公演当日は、保護者や多くの町民をはじめ、小中学生が鑑賞し、多くの人より称賛の言葉をいただいた。生徒のなかには親子二代にわたって人権劇出演という生徒もあり、強力なサポートを受けている。

（福井町ふるさと人権フェスティバル）

福井中学校では以前、教育集会所でそれぞれの学年が寝泊まりし、人権の学習を深める「集会所合宿」を実施していた。この取組を福井町全体に広めていきたいという思いから、12年前に「福井町ふるさと人権フェスティバル」を立ち上げた。当初はなかなか周囲の理解が得られず、学校中心の取組であったが、少しずつ地域の人を巻き込んだ活動となっていった。今では、取組を町民全体に広げようと公民館を会場に、実行委員会が組織され『人権を大切にし、共に助け合うふるさと福井』をテーマとして、園児、児童生徒から保護者、女性、高齢者など多くの住民の参加・協力を得て開催されている。今年も、午前中は人権劇を、午後からは公民館の特設ステージで、保育園児から大人までが参加して手話コーラスや人権なぞかけ等が行われ、さらに阿波踊りの鐘や太鼓、三味線の音が鳴り響いた。

また、屋外テントでは、阿南支援学校生徒や小中のPTA、婦人会によるバザーや特産品販売など、盛りだくさんで活気あふれるものになった。中学生も出店や人権コンテンツなどで協力した。回を重ねる度に、より多くの人とふれあい、つながりあえる大盛況のフェスティバルとなっている。



4. 実践事例の実績、実施による効果

(取組による成果について)

「福井町ふるさと人権フェスティバル」の会場を、教育集会所から公民館にすることによって、さらに多くの人々が参加できるようになった。また、公民館を通じて広報することにより、これまであまり学校と関係のなかった人々とも交流ができ、子どもと大人のふれあい、さらには大人同士のふれあい、そしてつながりあうことができるフェスティバルとなっている。

また、これまでの人権劇はすべてビデオとして収録され、町内の人権啓発座談会で話し合う題材になったり、市内小中学校の巡回教材として活用されたりしている。さらに、研究大会等でも人権劇を上演する機会にも恵まれるようになり、人権問題解決への思いを広く伝えることができ、上演する子どもたちにとっても態度化・実践化につながる学習の場となった。

最初、学校の取組として始めた人権フェスティバルが、今では多くの人々や団体を巻き込み、参加・協力を得ながら開催する町の一大イベントとなっている。昨年、人権劇シナリオ集「人権劇のあゆみ」を発刊し、いろいろなところで活用されている。

5. 実践事例についての評価

(取組についての地域住民の声から)

福中生らの人権劇に敬意

阿南市民

(2011年1月27日 徳島新聞の読者の手紙より抜粋)

福井中学校では26年前から毎年、人権劇を制作して町や市の大会で発表しています。

先頃、全26作のシナリオ集が発刊されました。大作で読み切るまでに1ヶ月かかりました。どの作品も啓発に大きな力を発揮する力作で、感心しています。生徒さんや先生方のご努力に、心から敬意を表します。

昨今、同和問題を素通りする人権教育もありますが、福井中の人権劇は常に同和問題を真正面に捉えています。どの作品もパワーがあり感動的で、同和問題は必ず解決できるという確信と、解決してみせるという決意が感じられる作品になっています。

支部大会に数回参加させてもらいました。「僕は中学に入学すると人権劇に参加します」と小学生が大きな声で発表。主婦からは「ふと気が付くと、身を乗り出して夢中になっている自分に驚いた」。高齢者からは「差別の醜さや愚かさには気が付き、人間としてどう生きるか、差別と闘うことの素晴らしさなどを孫の劇で教えられた」という声が聞かれました。今年も、中学生がどんな劇を見せてくれるか期待し楽しみにし、三三五五、町民が公民館に集う。福井町では人権劇によって、人権尊重が文化として位置づきつつある。誇らしいことです。

【福井中学校人権劇シナリオ集「人権劇のあゆみ」発刊によせて】

(取組について感じていること)

本校区では、人権フェスティバルや地域懇談会など、長年にわたって行われている人権啓発活動が多い。これらの活動は行うことが目的ではなく、「なぜこのような活動が行われるようになったか」という当初の思いを継承しつつ、豊かなつながりを求め、それぞれがどう関わっていくかを話し合うことも大切である。多くの方々のノウハウをいただきながら、無理なく、たのしく開催できるフェスティバルにしていきたい。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

阿南市立福井中学校

学校が、保護者・地域・関係機関と連携・協力のもとに人権教育の取組を積み上げてきた実践事例である。

連携した取組である「人権劇」「人権フェスティバル」が長年継続されてきて、人権意識の高まりと広がりが見られ、人権尊重のまちづくりにつながっている。

特に、人権劇の題材として地域・学校の実態から見えてきた課題を取り上げていることは、自分たちの問題として捉えやすく、人権教育を推進していく上で効果的である。

また、人権フェスティバルの会場を変更し実行委員会を組織して、多くの住民参加・協力に広げる工夫をした結果、参加団体が増え、学校での人権教育を発信する場としても有効であり、お互いに学び合える機会となっている。

長年継続している取組について、活動を行うことが目的ではなく、当初の思いや活動の必要性を共通理解していくという方向性を持っていることは、今後の継承・発展につながると思われる。